

金科奉と南北朝鮮の国旗（上）

—李錫寅（Tiger Lee）先生のご急逝を悼む—

森 善 宣

KIM Tu-Bong and National Frags of Both Koreas (part 1)
—Mourning Suddenly Lost Mr. Lee Suk-In or Tiger Lee—

Yoshinobu MORI

はじめに

朝鮮民主主義人民共和国【以下「北朝鮮」と略記】をめぐる動きが現在、国際的な関心事として毎日のようにマス・コミで報道されている。北朝鮮が行っていると主張する核やミサイルの開発のみならず、日本人の拉致事件で計らずも示された国内の人権状況、麻薬や偽造紙幣の製造から流通に至る工作など、今やさまざまな諸問題が一挙に噴出した観を呈している。この動きの発端は2002年10月17日、訪朝したケリー（James A. Kelly）米國務次官補と北朝鮮の姜錫柱第一外務次官との会談の際、後者が前者に核開発を是認したという米國発の報道だった⁽¹⁾。

北朝鮮が核開発の動きを本格化させる中、折しも同年12月5日に日本で朝鮮問題をリードしてきた『統一日報』編集委員の李錫寅先生がご急逝された。筆者は朝鮮問題を研究する一学徒として、「タイガー・李」の愛称で誰からも尊敬されて来られた李錫寅先生のご急逝に接し、心労と悲痛に苛まれたと言って過言ではない。なぜならば、李錫寅先生ほど朝鮮半島の平和の統一に心を砕かれ、それを「東京アンテナ」をはじめとするコラムで繰り返し主張された方は他にいないからである⁽²⁾。

筆者は、生前の李錫寅先生に大韓民国政府奨学金留学生候補としてご推薦いただいたことを契機として、李先生に親しく指導を受ける中で数多くの教授を賜り、現在までその教授に従い研究を続けてきた。筆者がこれまで「南北朝鮮労働党の研究」を4回にわたり本紀要に掲載し続けるなど、朝鮮解放史と通称される時期を中心に研究してきたのは、全てこれ先生のご教授を少しでも実践しようとしたところにその目的がある。李錫寅先生から賜ったご教授の核心は、筆者との初対面の時に渡された紙に直筆で書かれた“Was es eigentlich sein?”の一文に端的に表されていると言えよう。

そこで現在の北朝鮮をめぐるいろいろなアジェンダに鑑み、筆者は李先生のご急逝に接して「南北朝鮮労働党の研究」連載を一時中断し、北朝鮮がそもそもその樹立時においていかなる原状にあったのか、を広く紹介する論考を執筆することとした。論考のテーマとして選択したのは、当時の北朝鮮で数少ないインテリゲンチヤのひとり金科奉キムトクボンが書いた南北朝鮮の国旗に関する論文である⁽³⁾。

この論文の翻訳を選択した理由は、東西冷戦下というイデオロギー対立が先鋭化した中とは言え、樹立当時の北朝鮮が勇躍その希望に燃えて目指した新国家の理念が非常によく示されている点、大韓民国【以下「韓国」と略記】の国旗について深い洞察と鋭い批判を得ることができる点、そして朝鮮戦争に先立つ対米認識をよく示している点などからである。当時は金日成キムイルソンによる個人独裁体制の形成前であって比較的

に自由な論議がなされていたところから、北朝鮮の伝統的な対外認識もうかがい知ることができる。ここから我々は現在の米朝対立において、あたかもただひとえに北朝鮮に非があるという論議が成立しがたいことがわかるのである。

本稿は2回にわたる翻訳の第一回目（上）として、金料奉の略歴、北朝鮮樹立に際しての彼の役割をそれぞれ順に概説した後、金料奉が書いた論文「新国旗の制定と太極旗の廃止について」全7章のうち第4章までを邦訳する。次号では第5章以下を翻訳し、この論文から読みとれる北朝鮮の原状に考察を加えた上、翻って朝鮮半島の現情勢にも言及したい。

なお、翻訳にあたりできるだけ当時の用語法を尊重し、漢字語で現在すでに死語となったものでも意味を判読できる場合にはそのまま転記した。また、わかりにくい事件や事象に対しては、著者の（註）による注解とは別に、筆者独自の（註）を末尾に一括して示すことにした。さらに原文に示されている説明や図解は南北朝鮮の現在の国章や国旗とは異なるため、現在の国章や国旗を原色がわかるように可能な限りインターネット上のサイトから転借して掲載する工夫を凝らしたことを予め付言しておく。

I. 金料奉の略歴

金料奉は1889年3月17日に慶尚南道に生まれ⁽⁴⁾、1908年にソウルの普成高等普通学校を卒業した。中央・普成・微文高等普通学校で教鞭を執る中で、著名な朝鮮語学者の周時経^{チュシギョン}らと共に朝鮮語辞典の編纂と刊行にあたった。彼は既に、日本の朝鮮植民地統治下で朝鮮語学者として世間に名前の知られたインテリゲンチヤであった。

その彼が1919年に起きた3・1独立運動を経験し、反日の意思を堅くしたと言われる。金料奉は同年4月、上海に亡命して1924年から「大韓民国臨時政府議政院」議員となり、そこで上海仁成学院校長も務めた。ここで彼は朝鮮語研究を続け、その成果を出版する傍ら、独立運動を展開し、李東輝^{イドンヒ}らが中心となっていたいわゆる「上海派」共産党と関係したという⁽⁵⁾。

この後の1927年に金料奉はヨーロッパに巡回して見聞を広め、1932年頃から中国の抗日統一戦線に参加し始め、35年に義烈団で著名な金元鳳^{キムウォンボン}らの朝鮮民族革命党に加入、同党中央委員として活動した。金元鳳は金料奉の甥であった。金料奉は、朝鮮民族革命党内で内紛が続く中でも軍管学校の卒業生を中国へ送る仕事に従事したと言われる。そして1937年に活動拠点を重慶に移したが、蒋介石の弾圧が厳しくなるや、金料奉は中国共産党が「抗日の根拠地」としていた当時の延安まで幼い娘の手を引いて旅したと伝えられる⁽⁶⁾。

ここで彼は、金元鳳と路線を異にし、1942年に結成された「朝鮮独立同盟」の活動に携わることになった。彼はその実働部隊である「朝鮮義勇軍」の指導も含め、この同盟の主席として抗日運動を継続した。朝鮮独立同盟が中国共産党との緊密な連携の下、とりわけその援助を多く受けながら活動したところから、彼ら「延安派」と呼ばれる勢力に固い団結心が生まれたのであろう⁽⁷⁾。

日本の敗戦により朝鮮半島がその植民地統治から解放された後、金料奉は延安派の仲間と共に北朝鮮地域へ1945年12月に帰還したが⁽⁸⁾、新義州でソ連軍により朝鮮義勇軍が武装解除されたことを受けて、当分の間は「謙虚潜處」するとして政治活動を自粛していた⁽⁹⁾。だが、ソ連軍の後援を受けた金日成が同月17日に朝鮮共産党北朝鮮分局の責任秘書 [= 総書記ないしは委員長に相当] となるなど、北朝鮮地域でも政治情勢は動き始めた。特に同月27日に米英ソ三国外相会談で採択された「モスクワ協定」中の「朝鮮に関する決定」により、政治情勢は急転する兆しを見せたのである。

この情勢の変化を受けて、金料奉は自らが中央委員会委員長となって1946年2月26日に朝鮮独立同盟から「朝鮮新民党」へと名称変更して政党組織を立ち上げ⁽¹⁰⁾、南北朝鮮が統一した独立主権国家の樹立

活動に乗り出した。新党の結成に伴って南朝鮮地域で結成された「南朝鮮新民党」の党首となったのは、これまた当時のインテリゲンチヤとして著名だった白南雲^{ベナムナムン}だった。白南雲が自らの政治路線を描いた時に明らかになったとおり⁽¹¹⁾、朝鮮新民党の路線は党名そのままに当時の毛沢東が主唱した新民主主義論に立脚していた。

解放後に南朝鮮地域「解放」のための「民主主義の根拠地」として北朝鮮地域を創設しようと唱えられた「民主基地」路線も、中国革命を实地で実践するものだったと言える。この路線のためか、1946年8月に結成された北朝鮮労働党中央委員会委員長には金日成ではなく金料奉が就任し、当時は後者が前者に勝るとも劣らぬ立場だったことを示したのである。

例えば、当時の北朝鮮地域でソ連軍の最高責任者だったシトゥイーコフ（Terenti Shtykov）は、1946年9月に南朝鮮地域の三党合党に際してソ連軍と北朝鮮労働党の首脳部が会談した際、自らのメモに「金料奉は、金日成をして発言させ、ソ連側の要求条件を開陳させようと提案した」と書き残している⁽¹²⁾。実際に南北朝鮮労働党の合党により結成された朝鮮労働党において、金料奉は当初、同党中央委員会委員長に就任したと思われる。従来通説とは異なり、金日成は同党党首ではなかった⁽¹³⁾。

このように、金料奉は米ソ両軍の分割占領下で分断体制の樹立へ向かう決定的に重要な時期に、政治の中枢にあつて北朝鮮樹立、とりわけ憲法制定に深く関与した。のみならず彼は、朝鮮戦争と前後する激動期にあつて北朝鮮の国会に該当する朝鮮最高人民会議々長として長く北朝鮮の政治全般に大きな影響力を行使した。北朝鮮樹立に際しての彼の役割は、これまで看過されがちであつただけに、いくら強調しても決して過ぎることはないであろう。

II. 北朝鮮樹立に際しての金料奉の役割

金料奉が北朝鮮樹立に関与した経路は、国家、党、軍という北朝鮮を見る一般化した3つのレベルのうち、主に前二者の国家機構と党組織を通じてだった。彼が北朝鮮労働党々首として北朝鮮で実施される人民委員会の道・市・郡・面など各行政レベルごとの選挙や「建国思想総動員運動」などの大衆運動を背後から操縦したことはよく知られている⁽¹⁴⁾。

だが、北朝鮮樹立に際して金料奉は、単に法的・政治的な役割を果たしただけでなく、それに優るとも劣らず、当時の数少ないインテリゲンチヤとして社会的・文化的な役割も担当していたのである。そこで、ここでは金料奉が北朝鮮樹立に際し果たした役割を（1）法的・政治的な役割、（2）社会的・文化的な役割、に大別して概観したい。

（1）法的・政治的な役割

金料奉が民衆の前面に立って巨大な役割を果たしたのは、1947年2月に開会した北朝鮮の国会に該当する北朝鮮人民会議においてであった。彼は同会議々長となつたのみならず、同会議で設置された常任議員会議長となつた。この常任議員会とは「北朝鮮人民会議の休会中に人民会議を代表し常時、重要な諸問題を審議決定して、執行機関である北朝鮮人民委員会を監督するために（中略）必要」とされたものだった⁽¹⁵⁾。

実際に同会議で金料奉は、次のように発言して、北朝鮮人民会議と北朝鮮人民委員会との関係を示唆した。「討論なさる方は、限定時間を厳守して下さいます。大概は指導者 [=金日成を指す] に対する称揚に終始し時間を過ごす傾向があるが、報告内容に対して賛成かどうか、報告内容が事実と符合するかどうか、この点を中心に討論してもらいます。」⁽¹⁶⁾ 言うまでもなく、北朝鮮人民委員会委員長は、金日成だった。

金料奉は1947年後半から、第2次米ソ共同委員会の失敗後に南北朝鮮で分断体制の樹立へ向かう時期、

北朝鮮人民会議常任委員会委員長として特別会議を主催し、北朝鮮の臨時憲法制定に尽力した。臨時憲法の制定過程に関しては拙論に詳しいのでここでは繰り返さないが⁽¹⁷⁾、この臨時憲法の内容において新生国家たる北朝鮮の建国理念は明確に表れた。その建国理念とは、①人民主権と共和政体、②権利と自由の実質的保障、③計画経済の原則、の3点に要約できる⁽¹⁸⁾。

これら3点の建国理念こそ、当時の政治指導者たちの声を金料奉が代弁して示した北朝鮮の進むべき方向だったのであり、このために彼は臨時憲法の中に政府の権限を抑制する条項を付け加えもした。もちろん、既にこれら3つの理念が現在の北朝鮮で現実味を全く失い、どれひとつとして金正日現政権により志向されていないのは明白な事実である。しかしながら、少なくともその樹立当初において臨時憲法の「全人民的な討議」過程で建国理念が人民に示され、さらに金料奉が体制樹立後にも朝鮮最高人民会議々長兼同常任委員会委員長としてこの憲法に則り国政全般を「監督」したことは、次号で述べるように決して過小評価されるべきではない。

(2) 社会的・文化的な役割

金料奉が法的・政治的な役割以上に北朝鮮樹立に際し果たした大きな役割は、社会的・文化的に旧来の儒教の弊害を徹底的に批判し、それを変革しようとしたところにあった。後述する翻訳で示すとおり、金料奉は明確に儒教のもつ負の遺産を悟っていたから、とりわけ金日成総合大学の初代総長となってからは、教育を通じて旧習の打破や科学的な知識の普及に指導力を発揮した。日本植民地統治下では朝鮮人が教育を受ける機会が極めて限られていたから、北朝鮮樹立と前後してもそのまま継続して広く一般民衆に抱かれていた因習や迷信そして文盲などは、日本式の教育と共に清算すべき課題なのであった⁽¹⁹⁾。

これと関連して、北朝鮮初代内閣の教育相に前述の白南雲が就任したのは、決して偶然ではなかったと考えられる。白南雲が書いたように、儒教の言葉で共産主義を民衆に語る他なかった当時の指導者たちは、自らの理念を本気で次のように考えていたのである。「人間が人間を搾取するのを排除しようというのが、我々の主張する『仁』であり、米を生産する農民と機械を動かす労働者と事務技術を担当する勤労者たちを人格的に解放しようという『仁』である。禽獣草木を愛することも必要だが、人間を愛し、民族を愛し、生産階級を愛そうという『民主的仁』を実践しなければならないのである」⁽²⁰⁾

これから北朝鮮樹立と前後して金料奉が書き記した論文を翻訳するにあたり、筆者は、読者諸氏に今一度「それは本来どうあったのか」というタイガー・李の言葉を想起してもらいたい。そして、金料奉の論文中に溢れる高い理想と豊かな叡智を読みとっていただくようお願いする次第である。なぜならば、朝鮮戦争中から始まった金日成による朝鮮労働党内の粛清と個人崇拜を伴う独裁政権の樹立過程そのものが、それ以前の北朝鮮が堅持していた発展可能性、いわば「失われた宝」を暗示しているからである。「革命」を空しく叫び続ける現在の北朝鮮が回帰 (re-evolution) する場所は、正にそこにしかない⁽²¹⁾。

Ⅲ. 金料奉「新国旗の制定と太極旗の廃止について」

国章⁽²²⁾

朝鮮民主主義人民共和国の国章は「朝鮮民主主義人民共和国」という文字を書いた横長の帯に、稲穂を束ねた円の中に溶鉱炉のある工場があり、その後に白頭山があつて、その上から光が降り注ぎ、光輝く赤い星がある。

国章の模様は多元型で、稲穂の個数は片側それぞれに70個ずつであり、稲の株数は片側それぞれに6株ずつである。国章の光彩は、次のとおりである。

国章の光彩

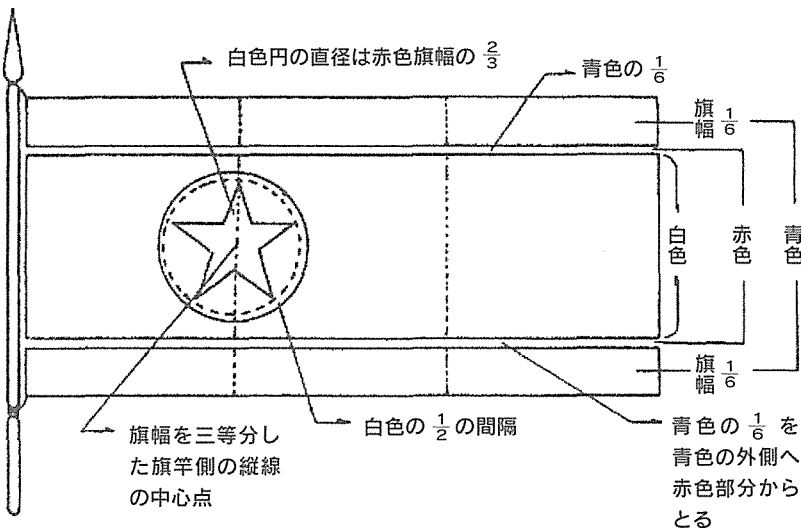
一、横長の帯と星と光線。 赤い光 (パーミリオン)

- 二、文字と横長の帯の縁取り 黄色い光（レモンイエロー）
- 三、稲穂 黄色い光（カルダモンイエロー）⁽²³⁾
- 四、稲穂と稲穂の間 褐色
- 五、稲の茎 黄緑
- 六、溶鉱炉 白色
- 七、山
 - (1) 前の山（2つ） 明るい部分—紫緑色
陰になる部分—紫青色（プロシアン+バーミリオン）
 - (2) 後の山 淡紫青（コバルト+バーミリオン）
- 八、水と空 青い光（コバルトブルー）

国旗

朝鮮民主主義人民共和国憲法に明示されたように、「国旗は横に、真ん中が赤く、上下に白く青い三光色の下地に加え、旗竿側の赤い下地にある白い円内に赤い五角形の星がある。旗の幅の縦横比は、一対二である。」縦を六等分し、上下それぞれ合わせて六分の二を青色とし、その外に赤色の側からそれぞれ白色部分をとるが、白色の広さは片側ずつ青色の六分の一である。そして、残りの下地は赤色である。白色円の中心は、赤色の下地の中に旗の幅を横に三等分した二つの縦線中、旗竿側にある縦線の中心点におくが、円の直径は赤い下地の縦3分の2となる。そして、白色円の中に赤い星を描くが、その中心もやはり白色円の中心と同一であり、星の端が円に接しないで、白色線の縦の二分の一くらい離れているようにしなければならない。

国旗の光は、分光器に表れる七原色中の青色、赤色でなければならない。



新国旗の制定と太極旗の廃止について

北朝鮮の通信記者は七月十八日、北朝鮮人民会議常任議員会議長の金料奉先生を訪ね、新国旗制定と太極旗廃止について、その意見を探問したところ、次のような談話発表を得た。

前言

朝鮮の新国旗問題の提起は1947年11月、北朝鮮人

民会議第三次会議の決定により成立した朝鮮臨時憲法制定委員会で作成した朝鮮臨時憲法草案を1948年2月、北朝鮮人民会議第四次会議でこれを全朝鮮人民の討議に付すため同月11日、『民主朝鮮』、『労働新聞』など各新聞に朝鮮臨時憲法草案を発表すると同時に、新国旗と国章の図案が発表されることから始まった。

この新国旗を創製することに対して、いくらかの人たちの質問があった。どうして新国旗を出して旧国旗を廃するのかと。しかし、新国家を樹立するのに新しい国法と新しい国旗を出すのは、当然のことであ

る。旧韓国の君主政体に合った国法や国旗が新朝鮮の人民政権に合わないのは、多言する必要もない。それゆえに憲法が現れ、またあらゆる新法令が出てくるように、新国旗が現れることになるのである。

それで、我々の新国旗は、新たに樹立する新国家の性質に合うよう創製されなければならない、そうでない旧国旗は廃止されねばならないのである。

我々の新国旗の意義を認識するために、まず我々の新たに樹立する国家の性格を簡明に述べなければならない。

今日、我々の新たに樹立する国家は、旧韓国のような、そのような封建国家でないのはもちろんながら、広大な勤労人民の權益が無視された、いわゆる民主国家という資本主義国家のような、そのような国家でもないものであり、1945年8月15日の解放と共に人民の自主意思により創建された新しい国家主権の形態である人民委員会を通じて主権を行使するようになる真正な民主国家なのである。

このような国家を樹立することになったのは、決して一朝一夕に卒然と、あるいは偶然になったのではなく、少なく見積もっても外憂内患の80年という長い歳月の中に、民族の幸福な国家を樹立するため先に倒れ後に続いた革命先烈の血の軌跡を踏んで得た貴重な教訓が結晶となった真理を把握したところからなのである。封建李朝の末期に欧米および日本資本主義国家の侵略圧迫を受けて来て畢竟、日本帝国主義の独占植民地となり36年間、亡国奴の生活までする過程のうちに、内には革命運動の不断の継承発展と、外には世界大勢の必然的な趨勢を正確に認識する結果として生まれ出ているのである。

李朝末期の政治的腐敗は、大院君の政権が倒れ、閔族が執権し、江華条約が締結された後、さらに甚だしく迅速な改革が期待されたが、遠大な目的と周密な計画がなく、時あたかも爆発した壬午軍乱（1882年）は、閔族の清兵引き入れにより数多くの軍兵が屠殺・放逐され、大院君は誘拐されて清国に行った恥辱の醜劇となる場面を生んだが、朝鮮革命運動はこの後から次第に発芽・成長するようになった。

国内運動において1884年の甲申政変に数多くの憂国志士の殺害と、東学農民戦争（1894年）に数十万の農民の流血と、被保護条約後の義兵運動（1905～1911年）に無数の熱血男児の殉国と、亡国後の3・1運動（1919年）に数万数千の犠牲を出す一方、変節・売国した奸族の輩たちも少なからず出現したところから、甲申政変に一重鎮だった者として亡国後に敵国の伯爵位を受けて「恩賜金」を受け取った者だとか、3・1運動の一首領だった者として「時中会」を組織し、極度にいわゆる「皇民化」を狂ったように叫び回った者だとか、その他33人とか48人とか、あるいは誰だ何だと言った者たちの中で無数の変節・墮落した者たちを見ることになった。しかし、3・1運動後「朝鮮共産党」が成立し、労働運動・農民運動・新文化運動などが展開されて以来、我が民族の解放運動は偉大な新世紀を開き直接、勤労人民の手中で確固として活発に展開するようになった。解放運動の推進路線だとか、全民族の真正な幸福を目指す富強な民主国家を建立する大道だとかを正確に理解するようになった。

国際関係において1866年、フランスの江華侵犯をはじめとして、米国の大同江（1868年）ならびに漢江（徳津）侵犯（1871年）と日本の永宗島侵犯（1875年）と英国の巨文島占領（1885年）を受け、清日戦争（1894年）、露日戦争（1904年）を経験し、被保護条約（1905年）を経て亡国（1910年）した後、36年間の奴隷牛馬の生活をする間、1876年の韓日江華条約をはじめ韓米条約（1882年）、英日同盟（1902年）などにことごとく朝鮮を「自主の邦」だの「難があれば互いに助ける」だの「独立と領土保全」だのと云々したが^(註1)、朝鮮を日本により滅亡させる第一段階である「保護設定」を英米両国の賛成で成就させ^(註2)、さらに朝鮮が日本に併合され滅亡する時に米英などの黙認するのを見たとし^(註3)、ハーグの密使運動（1907年）^(註4)やパリの平和会議での独立請願運動（1919年）が全て何らの実効も希望もなかったことを確実に見た。しかし、ソ連の10月革命後、朝鮮独立運動に対する真摯な援助とポーランドに対する独立承認と中国に対する不平等条約の取り消し、そのほか被圧迫民族の解放運動援助の事実や30年来の

対外和平政策の実行を見て、地球に広がった暗黒の帝国主義侵略勢力圏外に立ったソ連から、別途に新たな正義人道の光明が発射するのを見ることになった。

このような国内運動の発展と国際関係の帰趨を単純なくつかの事実から看破しただけではなく、人類社会の発展法則と世界の将来を予見する偉大な革命の先輩たちの学説を理解した連関の上で、判定することになったことを深く認識しなければならないのである。

我々が新たに樹立する国家の性格を要約して述べると、内には勤労人民を基本とし、外には進歩的民主力量を連結する国家とならねばならないのである。

1. 新国旗は前途洋々たる新興国家の象徴

我が国家は、定向なしに進むのではなく、必ず歴史の発展法則による正しい方向へ前進しなければならないのである。封建の余習と残滓を肅清し、資本主義の独占的偏向を排除し、先進的民主主義国家の道へ進まなければならないのである。この道の指向の象徴は、暗い夜にピカピカ行く道を指し示してくれる新星のように、旗の真ん中の赤い星がこれである。このような国旗は、前途洋々たる新興国家の象徴である。

2. 新国旗は富強で和平ある民主国家の象徴

我が国家は事実上、ある特権階級の独裁機構をつくるのではなく、必ず労働者・農民を基本とした真正な民主制度を建立し、富強を図り、帝国主義のどんな籠絡にも危険な幻想を抱くのではなく、必ず世界の進歩した民主陣営に強固に立脚して和平を保持しなければならないのである。この富強の象徴は、我が人民の胸中に先烈の後を継いで沸き立つ血の光のように、旗の真ん中の赤い星がこれであり、和平の象徴は雨が降った後、晴れた日の空の光のように、旗の中の青い光がこれである。このような国旗は、富強で和平ある民主国家の象徴である。

3. 新国旗は光明発展する幸福な国家の象徴

我が国家は、停滞あるいは退歩するのではなく、不断に努力、向上し、必ず光明発展するであろう。この象徴は、地球の上に明るく放射し照らし出す日の光のように、旗の中の白い光がこれである。このような国旗は、光明発展する幸福な国家の象徴である。

（註1）1876年の韓日修好条約第1条に「朝鮮国は自主の邦として日本との平等権を保有し以後、両国の和親の実を表すとし、双方が同等の礼で相対して、毫も侵略を猜疑できないのである…」。

1882年の韓米条約第1条に「…永遠に和平友好とし、万一他国が何か不公平な輕蔑を働くことがあれば…必ず互いに助けること…」。1902年の英日同盟の冒頭に「英日両国政府は、清韓両帝国の独立と領土保全を維持すること…」。

（註2）1905年6月29日、米国のウィリアム・コバロット・タフトは、日本首相の桂太郎に、朝鮮に対する日本の保護設定…をワシントンでは反対しないだろうと言ったし、大統領のセオドア・ルーズベルトは、東京にいる自分の個人的な代表を通じ、日本人たちの「朝鮮を改造」するのに「米国の反対を受けないだろう」ことを日本外務省に保証した。1905年8月12日、英日改訂同盟第3条に「日本国は、韓国に対する政治上、軍事上および経済上の卓越した利益を有するので、英国は日本国が諸利益を擁護・増進するために正当かつ必要だと認める指導・監理ならびに保護の措置を韓国に対して執行する権利を承認する…」。

（註3）1905年の英日同盟改訂時に、日本人の韓国保護を公然と宣布する英国の行動を悲痛に見なして、駐英代理公私の李漢應が自殺し、1908年に朝鮮政府の顧問として朝鮮の滅亡を方々で促進した米国人D・W・スティーブンスを在米義士の張仁煥・田明雲が射殺したけれども、英米両国の何らの注目も得なかったのは、もちろんである。

（註4）1907年に旧韓国参事の李相高、平理院検事の李備、駐露公使書記官の李璋鍾などが高宗の密令を受けて、同年6月にオランダのハーグで開かれる国際平和会議に日本の朝鮮に対する侵略の有様を陳訴して、国権の回復に関する援助を請求するため会議への参加を要請した事件。

それゆえ、我が新国旗は「前途洋々たる新興国家、富強で和平ある民主国家、光明発展する国家」の象徴である⁽²⁴⁾。

4. 太極旗は新しい民主国家の性質に違反する

旧韓国末から使って来ている太極旗は、周易の繫辭上傳にいわゆる「太極（一元）が兩儀（陰陽）を生じ、兩儀が四象（老陽二、少陽二、少陰二、老陰二）を生じ、四象が八卦（乾☰兌☱離☲震☳巽☴坎☵艮☶坤☷）を生じる」という話により、太極（☯）と八卦中の乾・坤・坎・離の四卦（☰☷☵☲）を取り出して作成したもののだが、ここで核心となる意義は陰陽二元にある。太極は陰陽二元が自ずから出るところの本体の一氣を言うもので、八卦は陽を奇、陰を偶として、陽の表号「—」と陰の表号「--」をもって、これをまた各々一陰一陽に分かちて、それを再び両分し、下から上へ三重にしたのである。

易の陰陽思想は、陽を剛健で動くもの、陰を従順で静かなるものとし、陽が主となり、陰が従となるのである。自然界や人間社会の全ての事物をことごとくこの陰陽二元に準えて認識、説明する。例を挙げて述べると、自然界の天地・日月・昼夜・明暗・春秋・夏冬・東西南北・円方・上下・前後・高低などなどの前者は陽、後者は陰だとし、人間社会の男女・夫婦・父母・君臣・貴賤・尊卑・吉凶・福禍・剛柔・健順・動静などなどの前者は陽、後者は陰だという。ところで、我が太極旗の太極において、その内の二つの部分は陰陽を内包した表象である。すなわち、紅色は陽、青色（または黒色）は陰で、四卦において「乾南、坤北、離東、坎西」という、いわゆる伏羲の「先天学」に依拠したものであれば、三乾、三離は陽、三坤、三坎は陰の表現なので、一言で申し上げると、この旗の太極、四卦は易の陰陽思想を基礎とした国家の性質を表現した旗なのである。いま国家の性質に関する古人の「陰陽学説」の一例を挙げて見れば、李暉光^{イェスグワン}（李朝宣朝時の吏曹判事であり、号は芝峰だった）は、次のように述べた。

「陰は陽に屈するから、あがらえば兇である。臣が君に対するのと、婦人が夫に対するのと、夷敵が中国に対するのと、小人（被治者すなわち常民を言うのである）が君子（統治者すなわち両班を言うのである）に対するのは、全て陰が陽に対するのと同じだから当然に屈するのであり、あがらえば敗れ、変となるのである」と述べた。これは、どれほど非民主的であろうか。しかし、これは決して李暉光一個人の思想ではなく、易理を信じた東洋封建国家の全統治階級の思想を代表するのであって、さらには全世界の非民主主義的支配階級の共通類似した思想なのである。こうして、過去の封建李朝において、臣が君に屈しなければならぬとして、国家に無上の権力を持った君主専制政体があり、婦人が夫に屈しなければならぬとして、家庭に三従（嫁ぐ前は父に従い、嫁いでは夫に従い、夫が死して後は子に従う）・七去不順（嫁は、父母に従順でない時、子がない時、淫乱である時、嫉妬深い時、悪疾がある時、口数が多い時、窃盗をする時、は夫家を去る）の悪い制度があったし、小人が君主に屈しなければならぬとして、貪官汚吏の下の人民魚肉の惨状があったし、夷敵が中国に屈しなければならぬとして、漢・魏・随・唐と肩を並べ隆盛した高句麗の大版図と「熊津都督」、「安東都護」を転覆、駆逐した新羅の精神とを捨てて、汲々とした「限界吾土」のために鴨緑江回軍後に臣と称して貢ぎ物を納めた恥辱の道を開きはしなかったか！

しかし過去、朝鮮の統治階級は、国家制度において専制政治すなわち非民主主義がよいと主張したし、国際関係において事大主義すなわち非独立主義が正しいと名実共に主張したのだが李朝末、仏・米・英など資本主義諸国家の侵略を受けて畢竟、日本には国まで亡ぼされた我が民族は、前後一世紀に近い長い歳月において独立と民主のために夥しい数の流血の闘争を継続して発展させてきた赫々たる革命歴史を持つことになった今日において、朝鮮の売国族徒党たちは憎らしくも狡猾に名実相反する欺瞞的な方法で「民主」の偽名を用いて民主を圧殺し、「独立」の仮面を使って独立を売り渡している。3・1運動の当時、

拳族的な流血闘争を行ったその時に、米国で居留同胞の血と汗からなつた金銭を巻き上げて安逸な歳月を送っていた李承晩が、出し抜けに「朝鮮が米国に委任統治を受けることをベルサイユ講和会議に請願する」といふゆる委任統治（mandatory）を主唱し、悪名が鳴り響いた李承晩がその後には「無抵抗主義」を継続して主張してきて、8・15の時期には米国の鉱業家「サムエル・ヴ・トルバー」という者に朝鮮の鉱山権を与えることにして、巨額の前払い金を受け取った（これは、米国サンフランシスコで発行する『朝鮮独立新聞』1946年1月23日付の新聞に明記されている）。

朝鮮に現れた李承晩がいわゆる「韓国民主党」だの「民主議院」だの「大韓独立促成国民会」だのという売国団体を指揮し、ご主人様である外国の勢力を借りて数多くの愛国団体ならびに個人を殺害・破壊・投獄・虐殺しながら、かえって「民主」を云々して、ソ米両軍の即時撤退と朝鮮人の自主全国統一政府樹立に反対し、米軍政の銃剣と売国テロ団の棍棒といふゆる「UN朝鮮委員団」という米帝の手先である数カ国の外国人の「監視」下で南朝鮮に単独傀儡政府の強制樹立を狂ったように吠えまくり、米帝国主義の植民地政策を徹底して達成させてやりながら、むしろ「独立」を云々し、「民主」と「独立」の性質に違反する李朝末の太極旗の残りかすを以て依然として人民を騙して国を売り渡そうとしている。

1946年4月5日にソウルの米軍政庁から発表したいわゆる「国旗制作法」というのは、以前に米国国務省に保管されていたいわゆる「朝鮮国旗の製法」というのを、名称だけ少し変えてそのまま再版で発表したものに過ぎないのである。

この「製法」の造作ならびにその「保管」と、また米軍政を通じて発表させた者が李承晩自身なのかそうでないのか、はよくわからないが、その「製法」の偽作・欺瞞性とその「保管」「発表」の米国の主体性を見ると、李承晩徒党と血縁があるのを注意しないわけにはいかない。

第一に、その「製法」において要領を見れば、下のようである。

「……太極……紅い円は陽、青い円は陰……、卦は四季と四つの方向を示す。……そして、卦は次の順序である。

- | | | | |
|---|-------|---|-------|
| 一、乾 —  | ……上左側 | 二、坤 —  | ……下右側 |
| 三、離 —  | ……上右側 | 四、坎 —  | ……下左側 |

……旗竿は、旗の左側、すなわち乾と坎がある方である。太極の紅は陽（男性）、青は陰（女性）を表示し、乾と離は天と日を表し、坤と坎は地球と月を表示する」（朴敬哲著『太極旗の原理』20～21ページ）とした。

このいわゆる「製法」が何を標準とし、どこから出てきたものなのか？！ 易のいわゆる先天学という乾南、坤北、離東、坎西から出たものでもなく、易の図面のように上南、下北、左東、右西に準拠して見れば、乾東南、坤西北、離西南、坎東北となるが、万一これを間方と見ずに正方と見て「乾南、坤北」ならば、離と坎の東西が逆になり、地図の図面のように上北、下南、右東、左西に準拠して見れば、乾西北、坤東南、離東北、坎西南となるが、これを万一、後天の乾西北と見るならば、残り三方向が全て異なり、もしも正方と見て乾北、坤南、離東、坎西と見るならば、離と坎の方位は先天に合うが、乾と坤の方位はどうしても合致しない。このように四卦の方位さえも間違っているのみならず、旗竿も誤って置いたのである。旗竿を乾と坎がある方に置いたのは、どのような理由からなのか。やはり「卦は……四方を示す」と言うのなら、これ正に「乾南、坤北、離東、坎西」で置かなければならないのではないか。ところが、東西の方向も分別できず、離と坎の方向を倒置する者にこの話はわからないだろうが、しかしながら述べる他はない。

そのような次第で、旗竿としては乾と坎の方に置くのではなく、乾と離の方に置かなければならなら

いのである。なぜそうかと言えば、旗竿は前進する方向を意味するから、明るい方に置かねばならない。ところで、離は日が昇る方、すなわち明るい方であり、坎は日が沈む方、すなわち暗い方なのだが、どうして旗竿を乾と坎の方に置くのか。また、乾を天、坎を月としたのならば、天月の方に旗竿を置くのはどんな意味なのか？夜行の意味なのか、あるいは「暗い方へ行く」暗行の意味なのか？

この「製法」の作者や、これをそのまま使えと言う者が、全て太極・八卦に関する周易の「先後天学」の関係もよくわからず、東西南北の方向も探す術を知らず、進退明暗の関係も知らないのに、米国防務省や米軍政庁の勢いを借りて、同胞を欺瞞・暴圧し、四方の方位を倒置したまま、明暗の進退を転換するよう強要する。この者たちが李承晩の徒党ではなくて、誰だというのか？日帝時代に太極旗の禁止されたことに反抗して、独立運動に使用した我が民族のその旗を愛護した心理を利用し、いま自分たちも何か愛国者であるかのようにこの旗を持ち、また一つの欺瞞材料と見なそうとしている。しかし、人民たちは騙されない。過去の日帝への反抗に何らの関係もなかった者たちが今、新国家樹立の新国旗制定に反対し、太極旗の使用を主張するのは、笑うべき哀れな時期を逸した行動である。過去、日帝時代には我々に他の国旗がなかった。太極旗だけが我々のもだった。それゆえ、我が人民たちは、この旗を愛し、憧憬した。しかし今、我々は解放されてから2年有余の間に民主国家建立の土台を磨き固めたし、今日、先進的で人民的で民主主義的な憲法を持つようになった。ここにおいて我々は、新民主国家の性格に合う国旗を選択することができるようになった。新国家に大典通編が必要なく合わないように、古めかしい太極旗は適合しないのである。我々が李氏朝の亡余の遺物を今また用いる必要がどこにあるのだろうか。

(以下、次号に続く)

註

- (1) この報道は「米国防務省の声明」として権威付けられていた。『朝日新聞』2003年10月18日、1面。
- (2) 李錫寅先生の略歴や業績については、ご夫人の大國未津子氏がまとめられた次の記事などを参照されたい。大國未津子「南北統一を願いつつ逝去した83才 分断国家の悲しいジャーナリスト」『国会タイムズ』第1163号（東京、2003年5月）所収。
- (3) 原文は次を用いた。金料奉「新國旗의 制定과 太極旗의 廢止에 關하여（新国旗の制定と太極旗の廃止について）」『北韓關係史料集』Ⅶ、서울、大韓民國文教部國史編纂委員會、1989年、pp.164-207。私有の資料に1ページ分の落丁があり、これを補うに際して九州大学法学部図書掛からその部分をご恵送いただいた。同図書掛閲覧担当の田中、入江両氏に御礼申し上げる次第である。
- (4) “一九四九年三月一七日 金料奉先生 誕辰六十周年（後略）”「解放后四年間 의 国内外重要日誌」、同上書、p.816。金料奉の出生地は東米と言われるが、機張という記述もある。金鍾範・金東雲編著『解放直後 의 朝鮮真相』第二輯、서울、朝鮮政経研究社、1946年、p.209。
- (5) 「김두봉金料奉1889-호는 백연(号は白淵)」この記事は、ネット上で次のサイトから引用した。<http://hanbat.chungnam.ac.kr/~phistory/lecture/persons/%B1%E8%B5%CE%BA%C0.htm> また、同様な記事は、次にも見いだせる。高峻石編著『朝鮮社会運動史事典』社会評論社、1981年、p.517。
- (6) 同上サイトの記事による。彼は宣伝雑誌『戦鼓』の発刊にも尽力したという。高峻石、同上書、p.517。
- (7) 例えば、朝鮮独立同盟副主席だった崔昌益の息子で解放後にロシアへ留学した崔東国は、父親への手紙の中で「モスクワで勉強していらっしゃる金料奉先生の子どもたちも同志たちも、健康に勉強しています」と書いている。ここからは延安派が家族ぐるみで固く団結していたことをうかがい知ることができる。崔東国『両親任前上書』1949年8月28日付、2面。

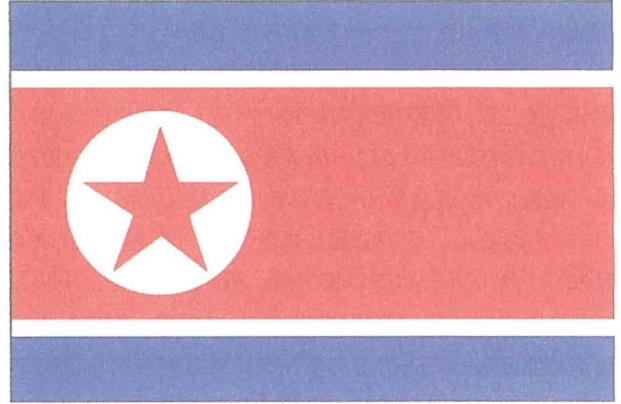
- (8) “一九四五年十二月一日 朝鮮独立同盟金料奉先生以下諸氏帰國”『記録日誌』『報道』第1巻第1号(平壤、民主朝鮮社、1947年3月)、p.64.
- (9) 民戦事務局編纂『朝鮮解放年報』1946年版、서울、文友印書館、1946年、p.146.
- (10) 沈之淵『朝鮮新民党研究』서울、図書出版동녘、1988年、p.80.
- (11) この点については、拙稿を参照されたい。森善宣「南北朝鮮労働党の研究」(四)南朝鮮労働党の結成〔後編〕『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第7集第2号(佐賀、2003年3月)、pp.81-82.
- (12) もちろん、その会見には金日成、朱寧河、許ガイなどが同席していた。「1946年9月27日」『쓰티코프(シトウイーコフ) 備忘録』第1巻、서울、中央日報社統一文化研究所、p.10. この資料は、同新聞社モスクワ特派員が原史料を収集して翻訳、編纂したもので、同研究所の李東鉉研究員のご厚意により閲覧が可能となったものである。改めて感謝の意を表明する次第である。
- (13) この点に関しては、延世大学校国際学大学院教授の朴明林氏が米国アーカイブスで資料調査の末、金料奉が朝鮮労働党中央委員会委員長であった事実を示す文献を発見したと証言した。朴明林氏との会談調査、2003年6月10日、延世大学校研究室。また、2004年2月刊行『国際政治』掲載予定(第三掲載順位)の拙論でも、全く同様な結論に至っている。
- (14) これらについては、拙論を参照されたい。森善宣「解放後の北朝鮮における『建国思想総動員運動』の展開」『アジア経済』第34巻第10号(東京、1993年10月)所収。
- (15) 『北朝鮮人民会議第一次會議會議録』平壤、北朝鮮人民会議常任議員会、1947年、p.2.
- (16) 同上書、pp.19-20.
- (17) 森善宣「朝鮮民主主義人民共和国の1948年憲法 — 制定過程から見たその政治的性格 —」、鹿児島県立短期大学『商経論叢』第44~45号(鹿児島、1995年3月・1996年3月)所収。
- (18) 金料奉「朝鮮民主主義人民共和國 憲法에 關하여(朝鮮民主主義人民共和国憲法に関して)」『北韓最高人民會議資料集』第1輯、서울、國土統一院、1988年、pp.29-31.
- (19) 「愛國農民들에게 거듭 感謝하며 人材育成輩出과 期待에 報答(愛國農民たちに繰り返して感謝し、人材の養成と輩出の期待に応える) 北朝鮮金日成大學總長 金料奉先生談」『農民新聞』第164号(1947年9月7日)、1面。
- (20) 白南雲「朝鮮民族의 進路」『韓國現代史資料叢書』11、서울、돌베개、1986年、p.68.
- (21) このような観念は、アーレントによっている。Hannah Arendt, On Revolution (志水速雄訳『革命について』中央公論社、1975年、p. 42, p. 278.)
- (22) 原文には冒頭に国章の図柄が掲げられているが、本稿では末尾にインターネットのサイトから採った現在の国章を掲げる。また原文にはないが、参考までに現在の国旗も掲げておく。前者は、1993年12月10日に朝鮮民主主義人民共和国最高人民會議第9期第六次會議において法令第24号として承認された国章法による。後者は1992年12月11日に朝鮮民主主義人民共和国最高人民會議第9期第四次會議において法令第10号として承認された国旗法によるものである。
- (23) 原文では「카드뮴알로-」であり、おそらく“cardamom yellow”の意味と思われる。
- (24) この後に原文では「1948年2月20日に発表された『朝鮮臨時憲法制定委員会』の新国旗についての解説と1948年4月17日『民主朝鮮』に発表された金日成大学物理数学部長・都相祿先生の『新国旗に対する感想談』を参考材料として付記」してあるが、本稿では省略する。前者の解説はここで金料奉が行ったそれと大同小異であり、後者は当時の自然科学的な水準に従った色彩や波長などに関する新国旗の解説だからである。なお、都相祿については次に詳しい。『北韓人名辭典』서울、中央日報社附設東西問題研究所、1990年、p.144.



조선민주주의인민공화국 국장

(現在の朝鮮民主主義人民共和国の国章)

出典；<http://www.geocities.co.jp/WallStreet/3277/kokusyou.html#付録4>.



(現在の朝鮮民主主義人民共和国の国旗)

出典；<http://www.flag.or.jp/nf/kp.html>